

学位論文審査結果の要旨

学位申請者 氏 名	Md. Monjurul Hoque
審査委員	主査 佐賀 大学 教授 白武 義治
	副査 佐賀 大学 教授 小林 恒夫
	副査 鹿児島 大学 教授 岩元 泉
	副査 鹿児島 大学 教授 田代 正一
	副査 琉球 大学 教授 内藤 重之
審査協力者	
題 目	<p>The Sustainable Conditions and Support System for Bangladesh Dairy Sector under the Global Competition Structure: Case Studies on the main dairy farming areas in Bangladesh</p> <p>世界的競争構造下におけるバングラデシュ酪農の持続的條件と支援システム —バングラデシュの主要な酪農地帯を事例に—</p>
<p>バングラデシュの酪農部門は、長い歴史を有し、国民の暮らしにおいて、雇用と所得、栄養と食事、エネルギーを創出する重要な役割を果たしてきた。酪農部門の国民経済における重要性を考慮して、政府は1947年に創設された酪農協を再編し、1973年に酪農協ミルクビタ（以下ミルクビタと略）を開設した。その後、ミルクビタは酪農家に対し多様な事業に取組み発展計画を遂行してきた。その結果、ミルクビタの組合員数は増加し、酪農家の生産性、原料乳生産量、乳牛飼養頭数の向上をもたらした。一人当たり年間ミルク消費量もまた増加した。このような状況下、1995年、政府は乳製品に関する貿易自由化政策を採り、同時に酪農家に対する助成金削減を行った。特に、2008年後半、政府は輸入粉ミルクの関税率を75%から36%へ切り下げた。この関税政策の転換は安価な粉ミルク輸入の激増をもたらした。これはメラミンの影響問題が浮上する中で安心・安全性への不安を高めるばかりでなく、国内の酪農製品サプライチェーン関連業者にとって経済的脅威ともなった。特に、酪農家や酪農協ミルクビタは、乳製品市場環境の複雑で</p>	

急速な変化に直面することになった。小規模酪農家は、貿易自由化によって変化した市場条件、世界的に隔絶した競争力に対峙することになった。

そこで、本研究の課題は、バングラデシュの酪農部門の持続的條件と支援システムの構築条件を明らかにすることとした。そのために、1) 激増する輸入粉ミルクが国内産原料乳の市場構造の変化と民間乳製品加工業者（以下は民間加工業者と略）が採る市場行動に及ぼす影響、2) 自由貿易市場下における小規模酪農家の経営方式と販売対応における持続的條件、3) 民間加工業者の競争戦略がミルクビタに及ぼす影響と、ミルクビタによる小規模酪農家に対する支援方策を実証的に検討した。研究方法は、首都ダッカ近郊の主要な酪農地帯でミルクビタ、主な民間加工業者による市場行動、マーケティング戦略に関する比較分析の形態をとった。データは関連業者に対する詳細な実態調査から得られた。調査は、バングラデシュの首都近郊の主要な酪農地帯であるシラズゴンズ県バハバリ、タンガイル県のカリハチとガタイル、ムシガンツ県スリナガルの4地域で行った。これらの地域は、近年、数社の民間加工業者が参入し、酪農協との集乳競争が激化している所でもある。聞き取り実態調査は、これらの地域の地方政府、酪農家、民間加工業者、ミルクビタを対象に行った。バハバリでは酪農家101、民間加工業者8、ミルクビタ支所、カリハチとガタイルでは酪農家50、スリナガルでは酪農家60、民間加工業者2、ミルクビタ支所を対象とした。これまでの関連文献は、大別すると、①ミルクビタの指導・販売事業による乳量増加や輸送費節減などの組合員酪農家に及ぼす経済効果、②原料乳における脂質などの成分量などに関する研究であった。しかし、乳製品のマーケティング、近年の乳製品輸入政策の国内酪農に及ぼす影響に関する研究は皆無の状況であった。この意味で、本研究はバングラデシュにおける貿易自由化政策下の酪農部門の持続的條件と支援システムを本格的に分析した最初のものであり、とりわけ社会的経済的に脆弱な立場の小規模農家や消費者や酪農協ミルクビタに視点を置いた実態調査に基づく研究である点に刮目すべき特徴がある。

分析の結果、次の点が明らかになった。第1に、貿易自由化による激増する輸入粉ミルクの影響によってバングラデシュ酪農部門は非常に大きなダメージを与えられたこと、1) 国内原料乳の最大の使用者として国内酪農家と強い関係性を有してきた乳製品加工・小売を行うスイートショップは、国内原料乳から輸入粉

ミルクへ変換していること、2) 主な民間加工業者はSNFテスト基準を2.5から4へ上げ、集乳日数と1日の集乳回数も減らして、国内原料乳を減らしていること、3) 酪農家は原料乳を経営費以下で販売するか廃業に迫られていること、4) ミルクビタは多くの酪農家から貯蔵力限界まで購入したこと、第2に、厳しい貿易自由市場下、小規模酪農家は、1) 調査農家の94%が複合経営方式を採っていること、2) 都市消費者や病院と契約を結び原料乳を直接販売していること、3) 全てが地方市場において産地仲買人に代わる酪農協の機能を必要としていること、第3に、民間加工業者の競争戦略によって、1) ミルクビタの市場シェアが縮小し純所得が減少したこと、2) 原料乳集乳においてミルクビタと組合員酪農家とのミスマッチが発生したこと、3) 組合員の中にもミルクビタへ最小限の量だけ販売し、他の加工原料に回していること等を明らかにした。

本研究は、世界的競争構造下におけるバングラデシュ酪農の持続的條件、酪農部門の発展の為の支援システムについて検討し、次の諸点を明らかにした。1) 政府は輸入粉ミルクの品質を厳格にチェックし、輸入量を制限し、輸入粉ミルクの関税を高めること、そして補助金給付による助成で酪農家保護を検討すべきであること、2) 酪農家は複合経営、都市消費者との契約取引を推進し、産地仲買業に代替する協同組合システムを構築すること、3) ミルクビタは、組合員酪農家に対する事業目的の説明、簡易な借金返済システムの設置、組合員が出荷しやすい原料乳集荷機構再編、加工技術を有する組合員との共同事業企画などによって組合員とのミスマッチ回避策を講じることなどを明示した。

以上、本論文は開発途上国の農業市場経済研究の分野において価値ある新知見を提起した。そこで、本論文は、博士（農学）の学位論文として十分に価値あるものと判定した。